

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4390101758		
法人名	株式会社 桜会		
事業所名	認知症高齢者グループホーム アクア		
所在地	熊本市南区八分字町22-1		
自己評価作成日	令和4年2月10日	評価結果市町村受理日	令和4年4月15日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなろ福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	令和4年2月24日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

出来る限り制約なく入所前のそれまでと変わらない生活していただくための支援を考えたうえで提供していただいています。施設内を自由に歩き来してもらい、その成果か出入りしづらい事務所の中を毎日通り返されます。広い中庭を入所者同士で散歩する姿も見られ、中庭が日々の生活に馴染んできたように感じています。今年度の秋にはサツマイモを植え、近隣保育園との芋掘りを社会的距離を保ちながら実施しコロナ禍でも少なからず地域との関わりを持つ取り組みも行いました。家族や近しい人との繋がりを出来るだけ断ちたくないという思いで面会解除できる時は感染予防に努めながら面会していただきそれが不安な家族には電話での通話で本人と話をし安心感を持ってもらう事もできたと思っています。昨年3月より再開したデイサービスアクアは毎日3名ずつご利用いただき仲良く過ごされています。開始当初は職員は送迎もあり、夕方には帰宅されるので入所者さまに精神的な影響も心配しました。しかしながら能力の高いデイサービスの方が入所者の方に教えたりと見ていて心が温まる場面もありデイサービスが始まりより活気が出てきたグループホームアクアです。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

平成28年の開設から4月でまる6年を迎えようとするホームでは、昨年認知症デイを再開したことで、地域から通う利用者との生活が再び始まっている。ラジオ体操の始まりを知らせる導入曲が流れると入居者が自然に集まり、馴染みの曲に合わせて体を動かしながら、これまでのリビングが更に賑やかになっている。運営推進会議を隣接する小規模多機能事業所との合同開催としており、初回会議で改めて会議の意義について紹介し、行政、地域、家族が参加する貴重な機会としてありのままを発信し、有意義かつ真摯に運営している。感染症の影響が家族との関わりや地域交流、外出の機会を制限させているが、今できる事に取り組み、中庭を活用した青空の下での食事会や保育園児との芋ほり交流など入居者の笑顔を引き出す行事が企画されている。入居者自身の持てる力を尊重し、むやみに手を貸さず、できる喜びを支えるホームの姿勢がコロナ禍においても浸透している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I.理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	今ある能力や歩行能力を一日も長く維持していただけるよう、積極的な介護、過介護にならないよう実践している。職場理念をタ方の申し送り時に毎日唱和することで理念を共有し実践にも繋がりがやすくなった。	開設時からの理念を新たに事務所内にも追加掲示し、職員が意識してケアに入るようにしている。昨年3月には共用デイも再開し、リビングが更に賑やかになったホームでは、感染症の状況を見ながら外出したり、両ユニットの合同行事や戸外活動の充実を図りながら、コロナ禍の中でもメリハリのある日常が展開されている。	3項目の介護理念はタ方の申し送り時に唱和して1日のケアを振り返るようにしている。今後理念の中に地域密着型事業所としての文言を検討したり、重複する部分がないか内容の変更などにかかわらず、全体を見直す機会が必要と思われる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	・「姿勢の良くなる体操教室」の開催 ・近隣保育園との屋外のできる範囲での交流 ・近隣住民と顔なじみとなるようなオープンな関係構築に努める	共用デイが再開したことで、更なる地域交流が期待され、入居者の生活にも好影響をもたらしている。「姿勢の良くなる体操教室」は、地域の健康支援センターとして活動し、中庭を活用した芋ほり行事で地元保育園児たちと秋の1日を楽しむ入居者の笑顔が運営推進会議資料等でも紹介されている。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	週2回の地域の元気にお過ごしの方を対象とした「姿勢の良くなる体操教室」を行うことで健康維持に対する啓蒙活動を行っている。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2カ月に一度の会議開催を行っていたがコロナウィルスの感染拡大によりR3年4、10、12月の3回の開催となる。	昨年4月の初回会議では参加者に向け会議の意義について改めて紹介している。2か月ごとの入居者の生活の様子をスライドで紹介し、リスク管理についてホームの考え方や取組を事例を通して報告している。参加者からの質問や疑問には丁寧に応じ、災害についても共に考える機会となっている。	議事録は参加者に送付され、家族からのお礼の言葉が聞かれたり、面会時にそのまま会議に参加されるなど有意義に運営されていることが窺える。次年度に向け今後はより多くの家族が参加できるような働きかけも必要であると思われる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	監督官庁である熊本市とは、綿密に連絡を取り合いご指導、ご助言をいただき施設運営を行っている。	「姿勢の良くなる体操教室」は週2回地域健康支援事業として定着し、ささえりあの協力が得られる他、運営推進会議への参加により地域福祉の情報がホーム運営に反映されている。報告書の提出や感染症についてのやり取り、運営に関する質問などに行政と密に連携を図っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	開設より継続してグループホームの目的や役割をご説明し施錠、拘束をしない方針を特に入所開始時にご理解していただいている。職員の入職時には理念を十分説明し、ホームの取組を伝えた上で身体拘束の指針をもとに拘束や虐待に対する姿勢を示している。一人玄関より外に出る姿を見かけた際は、そっと近づき一緒に散歩したい旨を伝えて世間話をしながら寄り添う、そんな対応をしている。社内勉強会では定期的に議題にすることで職員間の共有と意識の定着を図っている。センサーマット、人感センサーはいまだ未設置。	身体拘束については運営推進会議の中でも報告し、ホームの姿勢を示している。管理者は言葉使いについて入居者に馴染みのある方言を使うことは決して悪い事ではなく、入居者自身が理解できるやり取りや相手を思っている言葉選びが重要としている。センサーマットや人感センサーは使われておらず、外出傾向にある方にも後から付きそいそのまま散歩を楽しむようにしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	社内勉強会にて権利擁護について学ぶ機会を設けている。3ロックを介護の基本として職員全員に共有を図っている。また事例を出し、検討して職員間で今の介護をその都度見直す機会を作っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見人制度を活用している方がいることは周知できているが制度の中身を把握できている職員は依然として少ないため社内勉強会にて共有できるように行っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	見学時や契約時にわかりやすく説明している。その人が何を知りたいか、不安かを聞き取りを行いながら納得できるようにしている。疑義についてもその都度説明している。解約や改定等についても十分説明し、契約を締結している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者が意見、要望が出やすいように日頃から聞く耳を立てコミュニケーションを図るようにしている。またご家族へは施設内での取組を説明し意見、要望が出やすいようにしている。入所前にどのような生活をされていたか、そんなことを対話のなかでお聞きし職員に周知することで今の入所者への理解度や関心度を深められるようにしている。毎月のホームのお便りは継続して日常が伝わるような内容であるように努め、また必要時には面会自粛のお願いなど周知している。家族からの感謝の言葉、改善してほしいお言葉を申送り時、申送りノートにて伝達している。	入居者の要望は普段の関わりの中から聞き取り、支援に反映するようにしている。12月には状況を見ながら家族会を開き、コロナ禍の中、久々に一堂に介して意見や要望を聞く機会が持たれている。家族から出された意見は記録に残し、全職員で検討して結果を報告している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	申送り時と、毎月の勉強会時にはその時間を作り今必要な意見、提案を聞いている。事前に意見収集し勉強会時に議題にするなど言いやすい環境作りにも配慮している。毎朝夕の申し送りがカンファレンスの機会ともなっているで、その都度の気づきが出たら検討し改善すべき点はスピーディーに行えるように努めている。またその際は申し送りノート等で共有できるようにしている。	朝夕の申し送りで出された意見は申し送りノートに記録し、月のケア会議で検討している。これまで6時30分を朝食の時間としていたが「もう少し遅らせたらどうか？」との意見に1月より7時に変更し、入居者の状況によってはこれまで通り無理に起床を促すことのないようにしている。ケア会議は勉強会も兼ねており、職員の質の向上を図り入居者支援に反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は長年の介護現場の経験を生かし、各自が向上心を持って働けるような職場づくりに努めており、給与水準や福利厚生の上には特に努力している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修についてはできるだけ平等に受講の機会を設け、研鑽に努めている。オンライン研修が多く受講の対象が拡大しているが受講機会や確保が乏しいのが現状である。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍の現在も同業者との対面での交流は難しいが近隣の地域密着型サービス事業所とは互いに相談を電話にて行っている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人の希望や要望とご家族の希望や要望が必ずしも一致しない事中にはあるが双方の話を聞き入れ相違点を見つけ、初期に双方が安心して生活できるような支援を行っている。そのための十分な対話を行い、より良い関係性が築けるようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	初めての入所となるので不安感を訴えるご家族もあり、なにが不安なのか、そのために事業所が出来る事はこういった事か、そのやり取りを繰り返すことで不安感を解消でき安心できるとともに、信頼関係も築けるようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	見学時に本人やご家族からの希望を十分に聞き取り在宅支援が可能なのか入所すべき状況か、また緊急性についても見極めを行う。必要時は併設の小規模多機能ホームのご説明も行いご提案を行う。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入所者一人ひとりの今ある能力を見極め、暮らし全般のできる事をしてもらう。できることを実施し認められる喜び、達成感を得られることで日々の意欲に繋がっている。また入所者とデイサービスの利用者をうまくマッチングさせることにより入所者のできる能力をさらに刺激できているように感じる。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人と家族の絆はあって欲しいので、家族には契約段階でその旨を説明し、共に支えられる関係の構築ができています。できる限りの病院受診の付き添い、家族に電話したいという本人の希望あればすぐに対応するなど、家族にも入所していても家族としての繋がりの意識を持ってもらう。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍であったため積極的な馴染みの場所へは行けなかったが、面会を開放していた期間は少なからずあったため、その間に家族、馴染みの方との再会もあり出来る限りの途切れない関係を繋ぐ取り組みはできた。	朝はラジオ体操で1日をスタートし、入居者に馴染みの曲が流れると自然と体を動かされるようである。台所で洗い物をされたり、得意のそば打ちで出来立ての二八そばを皆にふるまわれる方など、趣味や特技が活かされ、入居者の励みとなっている。夏には家族の協力を得て墓参り支援が実現している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	集団での体操やレクリエーションを通して利用者同士の存在の確認、また協力する場面もありする側される側の良い関係も見られた。またデイサービスの利用者も加わり、相乗効果となって利用者同士の交流が毎日のように見るができる。		
22		○関係を断ち切らない取り組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院が長引き一旦退所というお話をしたがどうしても戻らせたいという希望がありお待ちしたという事例あり。結果として病院にてお亡くなりになったが関係性が築けていた確認と関係性を残したい気持ちも伝わる出来事であった。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	他愛のない会話から現在の暮らしの満足度や希望要望を引き出している。それを職員間で共有している。コミュニケーションの困難な方は表情や言動から推し量り把握、共有している。	職員は普段からテーブルやソファで寛ぐ入居者と何気ない会話を通して思いを引き出したり、表現が困難になられた方には顔の表情や動作、これまでの生活ぶりから推測しながら本人の意向に近づくように工夫している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	情報提供書や認定調査時の情報の閲覧などから情報収集し把握する。また家族時に若かりし日の事をお聞きし今とは違う一面を知り、それを申し送り時に職員間で共有している。また昔のお写真を持って来ていただき職員と本人とで共有することで話題作りにもなり親近感も湧くような取り組みも行っている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個別での会話や機能訓練、一人で行える活動や作業を取り組んでいただき今ある能力の把握と維持のための活動を行っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人が何を望んでいるかを日々観察や聞き取りから把握し、また家族から意向を聞いている。家族にはその都度現状の報告を行い、介護計画に反映させている。	個々の暮らし方の希望を引き出し、本人・家族の意向を優先しながらプランを立案している。入居間もない方の初回プランにはホームの中で安心して暮らしてもらう内容を掲げ、他者との関わりや排泄、入浴、食事など普段の生活を通じて自立の喜びやできる事で自信を持ってもらうように支援している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	業務日誌、個人ケース記録、カンファレンス、朝夕の申し送りの2回で情報共有を行っている。それにより介護計画の見直しや実践に生かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族の希望により訪問マッサージ事業所により週2回の訪問マッサージをお願いしている(一時再開したが現在は再びコロナウィルス感染予防のため休止中)。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	現在も地域との直接的な繋がりには行っていないが「ささえりあ飽田」からのメールにて地域の今の情報を随時確認している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所前からのかかりつけ医による受診を継続する方がほとんどである。付き添いは基本家族対応でお願いしており場合によって職員対応している。また付き添いが困難な方や最期の時の備えとして訪問による診療もあることを折を見て伝えている。現況としては家族対応で定期受診に行く方のほうが多い。	入居前のかかりつけ医を家族による支援が行われているが、状況によってはホームでも対応している。受診に出る事が困難になられた方は現在、3か所の医療機関から訪問診療を受けられている。歯科については必要時に治療が行われ、歯科衛生士のアドバイスも受けており、職員は毎食後の歯磨きを必要に応じて支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	職場内の看護師と介護職員が協働しているが良い関係が築けており、医療と介護もバランス良く安心感を持ってお互いが業務できている。訪問看護師は看取り期にお願いするケースが多いがその際は看護師が主に連携を取り力量を発揮できている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院が必要になった時に救急搬送先は主治医ごとに確認できており迅速に対応できるようにしている。また出来る限り早期退院を希望している旨を家族にも伝え安心感を持ってもらえている。病院関係者には情報提供を行い情報交換も密にできるように普段から良い関係づくりに努める。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所、契約時に終末期についての意向確認を行うが、その時期が近づいた時に再確認を行っている。食事量、体重の減少が著しくあった場合には家族に現状報告、またこれから終末期を迎えるケースにもなり得ることを伝え、事業所でできる事と希望を伝え、家族の意向も確認して安心してもらえるよう話し合う。	入居時に重度化・終末期支援についてホームの取組と、その時点での家族の意向を聞き取っている。代表者や管理者は家族の思いは変化するものであり、丁寧な説明を心掛けている。医療機関で入院されていたが、面会が難しいことから退院され、ホームで5日間の看取り支援が行われている。また、ギリギリまでホームで過ごされ医療機関で最期を迎えられた方もおられる。	訪問診療や看護、職員の連携により家族の思いに応える最終の支援が行われたことが聞き取りからも確認された。今後も日常を大切にケアの継続を期待したい。また、看取り支援後は本人を偲びながら1ページを残しておかれることを期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の一人ひとりの対応、夜間帯での連絡の手順を勉強会や入職時に確認している。併設施設と共用でAEDがあり、必要に活用できるように使用するべき状況や手順を職員が把握できているよう努める。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災、水害を想定とした避難訓練を年2回行っておりハザードマップ等を利用し想定範囲内での最適な避難方法の訓練をしている。また緊急時の連絡網の訓練も避難訓練時に行い備えている。	今年度は図面を見ながら机上訓練と、3月に隣接する小規模事業所と連携を図りながら、水害・火災を想定した訓練を予定しており、管理者間で話し合いを進めている。訓練については運営推進会議でも、報告の機会をもっている。避難誘導は入居者の状況(自力・手引き歩行、車いす)を色分けして速やかに行えるようにしている。ホーム外周を含め安全チェックは日頃から実施しており、備蓄についても日用品・食料をリスト表をもとに管理している。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	情報提供書や家族からの入所前、若かりし日の時の聞き取りなどでそれまでの人生の背景を知り、人格を尊重した対応を職員全員が行えるようにしている。またプライバシーを損なわないケアも気を付け年長者への尊敬の念を心がける。	入居者の尊厳やプライバシーに配慮した支援について、研修会や会議などで共有を図っている。呼称は基本的に苗字としているが、「名前と呼んで欲しい！」と伝えられる方には下の名前で対応している。同性介助については、希望に応じており、入居当初は要望されることもあるようである。身だしなみについても、その方らしいおしやれを本人の選択や職員のサポートにより支援している。	居室を含め入室の際は、声掛けやノックの徹底について今一度周知されることを期待したい。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	職員主導、業務優先にならないようこの一年心がけ、本人の希望や思いを尊重してきた。ホール内を歩き回る姿もよく見られたり自由度が増しているよう見られる。食器洗いや食器拭きを率先して申し出てくれたりと自己決定する場面も見られる。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	朝食の時間があるから早く起きていただきたいけど起きたくない！そんなケースもあるがその希望を大事にしている。集団行動は苦手というものの理解を示すが時には一緒に、とお声掛けをして共同生活の楽しさも伝わればと行っている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	変わらずワンパターンな装いにならないように心掛けている。また身だしなみも整っているよう配慮し洗髪後はツバキ油のヘアクリームを使用して整髪している。オシャレが大好きだった方には「いつもオシャレですね」などお声掛けするよう職員が気掛けている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	時折、料理本を見ていただき食べたいものの聞き取りを行ったりして食べることの楽しみを持てるような取組を行っている。見守りをしながら入所者数名に調理をお願いし(餃子)共同作業をする機会もあった。ほぼ毎月、おやつ作りを行い切る、混ぜる、流し入れる、飾り付けるなど軽作業をしていただいている。	日々の食事は献立作成から食材購入、調理までホーム職員が行っており、季節や入居者の好みなどを十分生かし、個々の食形態に応じながら提供されている。毎月のおやつ作り、イベント食(年忘れ鍋パーティ・餃子他)は楽しみの一つであり、入居者の出番も用意されている。普段も茶わん洗いや職員と一緒に取り組まれる方もおられる。食事は1名の検食者(代表・職員)が同じものを摂り、感想や気づきなどを活かすようにしている。	開設時からホーム内厨房で手作りされる料理は、懐かしい家庭料理から、目新しいものまでレパートリーの広さも特徴である。入居者の楽しみ、家族の安心にも繋がる食事支援が今後も継続されていくことを期待したい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	季節を感じられ家庭的でバランスの良い栄養摂取に心掛けている。量や形態にも注意を払い未然に誤嚥やムセ予防を行っている。食事形態は食べ方や摂取量を毎回確認し、気づきがあればその都度話し合い必要時は改善を行う。美味しく安全に食べられるように配慮している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に口腔ケアに声掛けし自力にて行えない方は職員がブラッシング等を行いケアを行っている。また歯科衛生士から直接のケアや磨き方の指導も行っている。必要時は歯科医師により治療も行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	1人ひとりの排泄パターンを職員間で共有し統一した介助、支援を行っている。それによりオムツ使用量の削減にも繋がるように行っている。また水分量にも気を付け少ない時は摂取できるよう好みを把握し一定量の水分が確保できるよう努めている。	個々の排泄パターンを共有し必要な声掛け・誘導を行い、日中はトイレでの排泄を支援している。自立の方もおられ継続できるよう必要な支援があれば検討している。各ユニット3か所のトイレが設けられており、それぞれ居室の横など使い慣れた場所を使用されている。夜間のみオムツやポータブルトイレを使用される方もおられ、使用しない日中のポータブルトイレにはクロスを掛ける等プライバシーにも配慮している。排泄用品を家族が持参される場合は、サイズなど適切なものを伝えている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	定期的に体操やゲーム性の高いレクリエーションを行ったり水分量の一定量の確保に努めている。飽きないように牛乳、ジュース、コーヒー、ココアなど変化を付けている。また一般的な水分を好まれない方は家族に聞き取りを行い摂取量の確保に努めている。できる限り下剤を使用しないように取り組んでいる。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	ユニットごとに曜日を分けて週3回を基本として入っていただいている。そのほか希望あればいつでもは入れるよう職員に周知している。	週3回の入浴を基本に、午前を中心に支援している。希望や失禁時などはその都度対応している。開設時から脱衣所や浴室は、掃除用布を幾種も使い分け清潔に管理しており、気持ちのよい入浴に繋がっている。また、冬場は柚子やみかん湯などを取り入れ、季節を楽しめるようにしている。	今後も入居者や支援する職員にとっても楽しみとなる入浴への一工夫に期待したい。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	本人や家族に聞き取りから就寝、起床パターンを知り、あとは希望に応じて休んでもいただいている。また日中の休息に関しても自由にいただき、体力的に休息が必要な方に関しては休息時間を設定し長々とした昼寝にならないよう徹底している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	1人ひとりが内外用薬の有無の確認を行い、また副作用についても職員全員が理解できるよう努めている。また処方の変更などあれば申し送り等で周知、個人記録に記載するよう行っている。変更後の作用についても一人ひとり報告できるようにしている。また家族よりも普段の様子は把握できているので服用中の薬の必要性についても看護師主導で話し合い家族に提案し、本人らしくいられるよう薬で調整をしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	1人ひとりの生活歴を知り、今ある能力に応じて生活において必要な家事をお願いしている。家族より差し入れられた食べ物などを提供し、それまでの生活とできる限り変わらない、不自由さが無いように心がけている。家族に対しても普通の家で生活する感覚と認識してもらい、とりあえず何でも言ってもらえるような関係性を築けるように行っている。気分転換には中庭を利用しランチをしたりは変わらず行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	例えば買い物に行きたいという希望が出た場合は応じるようにスーパーに買い物に行っている。その際は毎回決まったスーパーに行き混乱を避ける。また歩ける能力がある方には積極的に散歩に声掛けし気分転換にもなるよう心がけている。	感染症対策を施し、状況を見ながら今年度も桜見やこいのぼり、イチョウ・紅葉見物、ミカン狩りなど季節の外出を支援している。中には家族と墓参りに出られた方もおられる。ホーム内には安全に散歩できるスペースや花壇、畑には季節の花や野菜を育てており、日光浴を兼ねた外出の機会に繋がっている。	以前のような沿道でのマラソンの応援をはじめ、地域に出る機会は制限されており、今後も外出に代わる楽しみ事を支援されることを期待したい。DVDやYouTubeを使い、国内外の旅行や名所探索などを楽しむことも良いと思われる。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	今年度も積極的な不特定多数のいる場所には出向かずお金を持つ機会はなかった。普段の金銭管理については家族と施設側で管理を行っている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	入所者の方から家族に電話をする旨は家族には伝えており希望あればいつでも電話を掛けている。その際は本人に代わる前に電話する事情をあらかじめ説明し傾聴してもらっている。手紙は書いたことがないので機会あれば希望を募り行ってみたい。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	一般家庭にあるようなしつらえを目指しお花を飾ったり季節がわかるようにカレンダーや壁面飾りを毎月の担当職員が行っている。また余計なもので障害にならないように整理整頓には努めて快適に過ごせるようにしている。	共用空間は家庭的な雰囲気と、壁面や庭先の花などを飾り季節を感じる事が出来る空間作りに取り組んでいる。訪問当日はそれぞれのユニット職員が工夫し春をイメージした壁面が見られた。ホーム内は感染症への対応としてこれまで以上に掃除や換気、消毒など衛生管理に努め、入居者の移動の妨げになる物はないか等確認しながら整理整頓を行っている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用空間は天井が高く圧迫感の無い空間作りをしている。気の合う利用者には職員が座席配置を考え快適にストレスなく過ごせるように努めている。独りになりたい時の居場所作りはまだ出来ておらず検討の余地あり。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	その人らしい居心地良いお部屋にしたいという声が職員間で上がってきたため、本人や大切な人の写真を家族に持参してもらいそれぞれの自室に飾りつけを行うように始めたところである。その他家族に好きなもの、愛用品などあれば持参してもらうよう募っている。	一人ひとりの入居者に応じた居心地の良い空間作りの必要性について、職員からの提案があがり、現在、見直しや新たな取組をはじめている。衣類や寝具をはじめ、仏壇を持ち込まれている方もおられる。収納は主にホームが準備している3段ボックスが利用されている。職員は掃除や換気に努める他、排泄用品は見えない場所に置く、布団はきちんとたたみ、利用しやすいようにしておくなどプライバシーにも配慮した支援を共有している。管理者は「その方らしい部屋」について今後も工夫していきたいとしている。	物品の多いことが安心に繋がるものではないが、少々殺風景に感じる部屋も見られた。現在、職員間で検討を進めており今後が期待される。趣味や好きな花、動物などが載ったカレンダーなども良いと思われる。

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	バリアフリー空間で安全に過ごすことが出来、また車いすの方でも移動しやすい空間作りとなっている。手すりに障害がないよう十分に配慮している。事務所の中を通り抜けたりと移動の自由度も高く、自発的に職員に一言声掛け調理場に入り食器洗い、拭きを行ってくれている。		